



©Yuki Asada

“一村一品”で世界とつながる

1980年代に大分県で広まった「一村一品運動 (OVOP※)」。その土地にある“人”と“資源”を活用した“一品”を生み出し、住民主導で地域振興を図るこの取り組み。近年、開発途上国を中心に世界各地で導入されている、地域開発のアプローチの一つだ。

この“海外版一村一品”の先駆けとなったのが、アフリカの小国マラウイ。2003年に大分を視察した大統領のイニシアチブによりOVOP事務局が設置され、JICAの支援を通じて“マラウイならではの”商品開発が進められている。

中でも人気があるのが南部のムワンザから生まれた一品、バラの形をしたハ

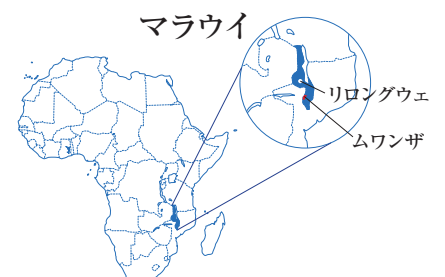
ニーキャンドル。古いハチの巣箱が捨てられているのを見た青年海外協力隊が、そこから蜜ろうを取り出してキャンドルを作ることを提案。「こんな素敵な製品ができるなんて」と村人も積極的に製作に取り組んでいる。そのほかにも、パーム油を原料にした石けんや天然のアクアマリンのアクセサリ、白土粘土を使った陶器など、製品の数は30種類以上にも及ぶ。

「海外にももっと輸出して、自分たちの村の良さを知ってもらいたい」というのが、村人の共通の思い。マラウイの“一村一品”が世界各地で見られるようになる日も、そう遠くないかもしれない。



ハチの巣箱を活用してハニーキャンドルをつくる村人。首都のアンテナショップや地元のマーケットで販売されている

★ハニーキャンドルとパームオイルの石けんを各5人、陶器のマグカップを3人、チテンジ(布)を2人、ピアス&ペンダントトップを1人にプレゼント! → 詳細は38ページへ



※One Village One Product movement